

大阪商業大学学術情報リポジトリ

大学のプレゼンテーション教育における 個別指導の実践報告 ―「GPDS 把握シート」を用いて―

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2022-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中谷, 陽仁, 佐藤, 敦子, 正木, 幸子, 横山, 宏, NAKATANI, Akihito, SATO, Atsuko, MASAKI, Sachiko, YOKOYAMA, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1289

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



大学のプレゼンテーション教育における 個別指導の実践報告

—「GPDS 把握シート」を用いて—

中 谷 陽 仁
佐 藤 敦 子
正 木 幸 子
横 山 宏

1. はじめに
2. 授業のコンセプトと授業内容
3. 「GPDS 把握シート」を利用した個別指導に用いる情報
4. 「GPDS 把握シート」の出口別標準コメント
5. 「GPDS 把握シート」で得られた情報とその解釈
6. 個別指導の実践例
7. 指導結果の考察
8. おわりに

1. はじめに

筆者らは大阪商業大学（以下、本学）でプレゼンテーション（以下、プレゼン）の授業を担当している。プレゼンの授業では、発表内容の企画・発表資料の作成・他者の前での発表が全部完遂してこそ学習目標が達成できると考えている。とりわけ、一人では他者の前で発表を行なうことはできず、人前の発表によって得られる経験は、プレゼンの上達には不可欠であると考え、これまでに「視聴分離方式」や「バトル方式」などの教育手法を検討してきた¹⁾。

ところで、筆者らが担当してきたプレゼン教育の授業では、毎回まじめに出席していた受講者が、いざ最後に他者の前で発表する日になると離脱するという状況があった。彼らにその理由を尋ねたところ、発表内容が思いつかない・発表資料が思うように作成できないなどの知識やスキルの不足に加え、人前での発表が苦手や不安であるなどの発表に対する自信のなさや意志の弱さによることが伺えた。この状況において、筆者らは、タイミングを逃さず

1) 正木幸子、横山宏、佐藤敦子、中谷陽仁「大学におけるプレゼンテーション教育手法の総合的検討」『大阪商業大学論集』第191・192号合併号、2019年

に彼らの気持ちにマッチした声掛けをするだけで、離脱しそうな者を救うことができる経験をしており、発表から離脱させないための工夫が可能であると考えてきた。

その工夫として、プレゼンの一斉授業（課題説明・スキル練習・課題演習）での指導において、発表の経験と場慣れをしてもらうために、授業15回の中で段階的に難易度が上がる3回の発表の場を設定して授業を行なった。

そのうえで、受講者の気持ちを事前に的確に把握し、受講者の気持ちに沿った個別指導に努め、叱咤ではなく激励のスタンスをとることで、本来クリアして欲しかった最後の発表のハードルを下げる授業展開が実現できた。この受講者の気持ちに沿った個別指導の方針は、①受講者個々の学習状態や心理状態を把握して個別に指導し、②観察を通じた声掛けや励ましによって学習指針を与え、③成果よりも努力を評価することである。

また、教員目線の観察だけでは発表から離脱するかもしれない者を見落す可能性があるため、受講者自身にプレゼンに対する気持ちを答えてもらう取り組みを行なった。具体的には、プレゼンに取り組む前後に、プレゼンの目標（Goal）・計画（Plan）・行動（Do）・反省（See）に対する気持ちを、WEB上に設定した調査シート（以下GPDS把握シート）でリアルタイムに自己申告してもらうことである。この結果からわかる17種類の出口から、さらに細かく状態を把握し、発表から離脱するかもしれない者に対して、タイミングよく状況に適した声掛け（コメントの提供）を行なうこととした²⁾。

この声掛けを頻繁に行なうと受講者の負担になってしまい、授業に来なくなってしまったり、形骸化して効果が薄くなってしまったりすることが危惧される。したがって、効果的なタイミングを見計らって1度だけ行なうことが、本指導法のポイントである。

そして、GPDS把握シートの情報と教員目線の観察を組み合わせることで、一斉授業の中でも、受講者に絶えず寄り添いながら、対話に重きを置いた個別指導の実現を目指した。

このGPDS把握シートを用いた個別指導法は、2018年度より3年間にわたり継続して実施してきた。しかし、2020年度は新型コロナウイルスの影響によって授業の11回目以降を対面で行なうことができなくなったため、個別指導と3回目の発表はオンラインで行なった。

本稿では、2018年度より3年にわたり実践したGPDS把握シートを用いた個別指導法の考え方と実践した結果を報告する。

2. 授業のコンセプトと授業内容

対象の科目は「情報活用A」（1年次後期2単位、副専攻選択科目）で、表1に各年度の履修人数と単位取得者数、表2に「情報活用A」の授業内容について示す。

なお、2018年度と2020年度に単位を取得していない者については、授業放棄（初回または途中から欠席）したとみられる。また、2019年度に単位を取得していない6人のうち、2人は

2) 中谷陽仁、佐藤敦子、正木幸子、横山 宏、「大学のプレゼン教育における個別指導法の組み込みの研究（2）—GPDS把握シートを用いたオンライン授業での取り組み—」『情報コミュニケーション学会第18回全国大会論文集』、2021年、p.36-39

表1 履修人数と単位取得者数

年度	1年生	2年生	3年生	4年生	計	単位取得	不合格
2018	9	0	12	10	31	29	2
2019	14	9	2	20	45	39	6
2020	10	9	4	1	24	22	2

表2 「情報活用 A」の授業内容

授業の到達目標	発表資料作成技能の基本を習得する。 プレゼンを構築し、実践する。
受講者の特性	パソコンが不慣れである。 学習意欲は低い。 発表の経験が少なく、苦手である。
評価基準	積極的主体的に取り組んだか。 発表資料作成技能の基本を習得したか。 プレゼンテーションを構築し発表できたか。

1度目の発表を行なったのみでその後出席せず、残りの4人は1度も授業に出席していない。

【指導の方針】

- ・後期が始まったばかりでやる気のあるうちに易しいレベルの発表（1回目）を行なってもらう。
- ・3回のプレゼンのすべてにおいて、「練習の場」であるということを強調し、質は問わず、失敗してもそこから学べるように良い所は褒めたうえで優しく指導する。
- ・発表内容の改善については、優しく指摘し、良いところを褒め、十分な配慮を行ない、次回以降への改善点についてのアドバイスをする。
- ・この授業での発表は、人生を左右するような、例えば就活での発表ではない。あくまでも「練習の場」であるということを強調する。
- ・発表の準備ができていなくても授業に参加し、他者の発表を視聴し、自己の発表の糧とするように促す。
- ・2020年度におけるオンライン移行時は、課題の提出を優先して期限の延長や再延長を行い、提出期限を配慮する。

【従来の授業内容】

15回の授業が対面で行なわれていた従来の場合は、発表テーマの自由度・資料作成の条件・資料作成時間の長さ・発表時間の長さ・質疑応答の有無の5項目で難易度を3段階に調整し、それぞれプレゼン1、プレゼン2、プレゼン3という3回の発表の場を設定した。設定した難易度は、あくまでも教員のこれまでの経験に基づくものであるが、概ねプレゼン2がプレゼン1の1.5倍程度、プレゼン3がプレゼン2の1.5倍程度の難しさと想定している。表3に授業の回数と授業内容を示す。

表3 授業の回数と授業内容

授業回	授 業 内 容
1～2 回目	授業ガイダンス、基本操作など
3～5 回目 [プレゼン1]	自由テーマ：「おすすめの〇〇」 ・スライドはタイトルも含め3枚以上 ・自撮の写真1枚以上使用 ・イラストや図形を使用する場合は自作とし、ネットからの素材使用は一切禁止 3～4 回目：資料作成 5 回目：発表1分、質疑応答なし
6～9 回目 [プレゼン2]	自由テーマ：「おすすめの〇〇」 ・スライドはタイトルも含め5枚以上 ・写真等の素材はネットから自由に使用可 6～7 回目：資料作成 8～9 回目：発表3分、質疑応答あり
10～15 回目 [プレゼン3]	指定テーマ：「〇〇県の紹介」 ・スライドはタイトルも含め5枚以上 ・自作の表、または、グラフを1つ以上 ・写真等の素材はネットから自由に使用可 10～12 回目：資料作成 13～15 回目：発表5分、質疑応答あり

表4 授業内容 (2020年度 オンライン時の変更部分)

授業回	授 業 内 容
11～15 回目 (オンラインで実施) [プレゼン3]	指定テーマ：「〇〇県の紹介」 ・紹介用写真を3枚提出 ・写真等の素材はネットから自由に使用可 ・導入、写真の説明、まとめの文章を提出 11～14 回目：資料作成 15 回目：相互閲覧

【2020年度の授業内容】

2020年度は、1回目から10回目の授業は対面であったが、コロナウイルスの影響により、11回目以降はオンラインで実施することになった。それに伴い、同じテーマでオンラインでも可能なものに変更した。具体的には、本学で運用されている学習システム manaba³⁾ を用いて、指定した県を紹介するための写真を3枚、それらを説明するための文章、導入とまとめの文章をそれぞれ提出させ、担当教員が提出された写真や文章について体裁を整えて manaba の Web 上に掲示し、相互に閲覧をすることで発表の代わりとした。表4にオンラインで実施することになった11回目から15回目のプレゼンのテーマと課題条件などを示す。

また、オンライン移行での受講者への配慮は、全員がパソコンを持っていないことを踏まえて、「スマートフォンでの学習を前提としており、専用のソフトなどを購入する必要はな

3) 大阪商業大学、「manaba ログイン」、<https://daishodai.manaba.jp/> (2020年1月28日アクセス)、朝日ネット、「manaba とは」、<https://manaba.jp/> (2020年1月28日アクセス)

い」という旨と今後の授業計画や成績の評価方法などについての説明を行い、心理的に負担がかからないようにした。

3. 「GPDS 把握シート」を利用した個別指導に用いる情報

受講者のプレゼンの取り組みに対する気持ちの調査方法には GPDS 把握シートを用い、教員が気になった受講者の観察と指導の記録は、個人指導記録ノートを用いた。

(1) GPDS 把握シートによる調査方法

今回用いた GPDS 把握シートは、筆者らが所属するやる気研究会（任意団体）で開発した「イベントにおける Before/After 型やる気度調査法」（以下、B/A 型調査法）をプレゼン用に改良したものである⁴⁾。B/A 型調査法は、イベント参加で心の中に起こる気持ちを、目標（Goal）・計画（Plan）・行動（Do）・反省（See）への4段階で把握しようとするものであり、4段階構成の質問に Yes/No で回答し、記号 A～Q の17種類の出口（記号はランダムに設定）に到達する。質問1～質問4が目標（Goal）・計画（Plan）・行動（Do）・反省（See）に該当する大区分の質問であり、いずれかに No と回答すると、分岐した質問5～質問16に導かれていく。

今回のプレゼン用では、質問1が「自分の意志でプレゼンの目標を持っていますか?」、質問2が「プレゼンの目標を達成するために何か計画を立てていますか?」、質問3が「その計画に沿って行動を起こしていますか?」、質問4が「その結果、思った通りに進んでいますか?」としている。図1に質問1～質問16の構成を示す。

図1は質問の構成を示すものであり、実際の調査シートではない。実際のものは、授業前に使用するものは語尾を「しますか?」とし、授業後に使用するものは「しましたか?」としている。

また、出口記号 A～Q に対し、順序尺度としての評価値（0～10）を対応させている。なお、本調査で想定する教員の理想的な受講者の状況は、質問1～質問4にすべて Yes の回答となり、出口が D となる場合で評価値10となることである。目標を持っていない場合でも、目標を探す行動を行なっている場合、出口の評価値は3以上になっている。また、出口 B は、目標達成のために行動を起こした結果、思った通りに進んでいるため、評価値は9としている。

図1で構成した質問群は、従来は図2の右側で示すような流れ図的な表現を用い、紙媒体の調査用紙で実施している。今回は図2に示すように manaba を利用して Web 上に質問・回答画面を設定し、回答をリアルタイムに集計できる仕組みで実施した。受講者は、画面右側に表示される紙ベースの質問をたどっていった結果（出口記号）に対応して、画面左側のボタンを選択して提出する。

4) 横山宏、後藤由美、富島磨由美、増尾美恵子、ワークショップ「生徒・学生に秘められた『イベントのやる気度調査』」『情報コミュニケーション学会第12回情報教育合同研究会、研究報告』Vol.13、2016年、p.18-19

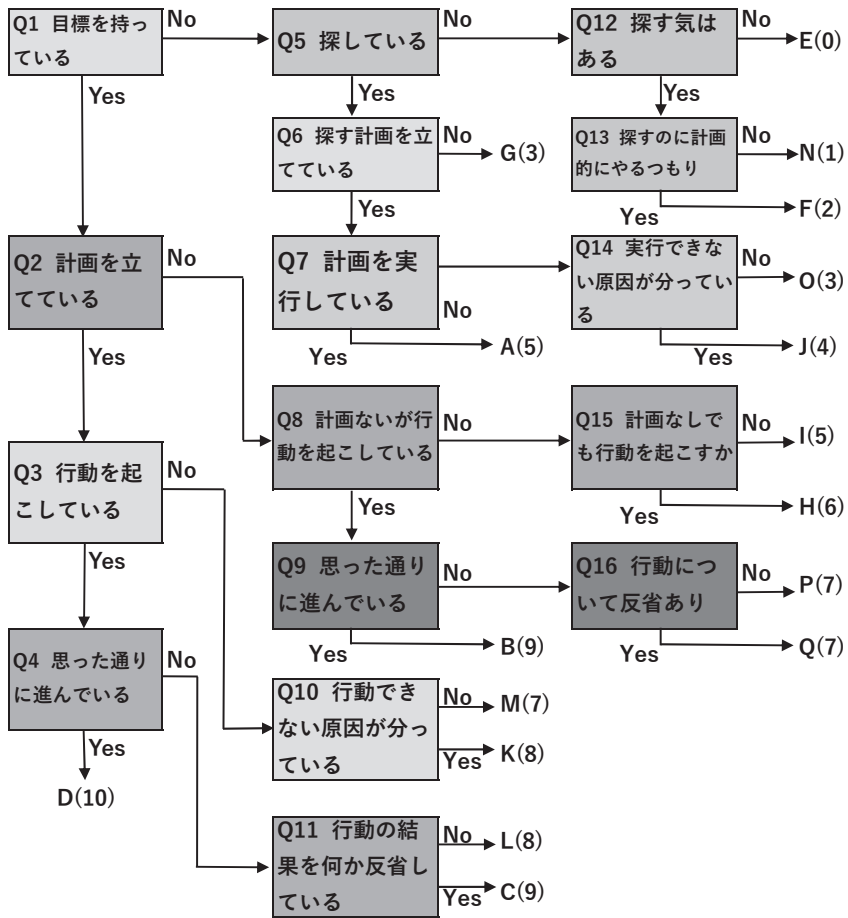


図1 GPDS 把握シートの質問の構成

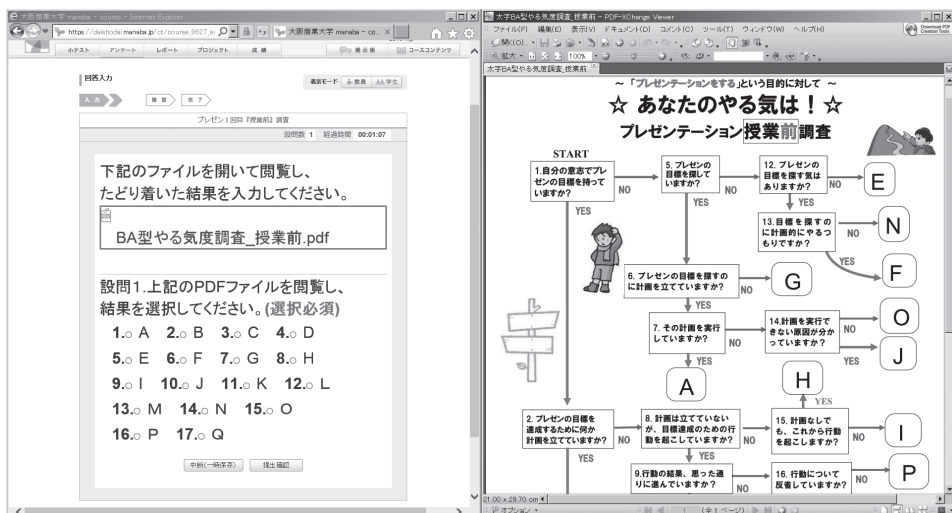


図2 Web システム (manaba) での実施画面

表5 結果に応じた標準コメント（抜粋）

選択	標準コメント
A	プレゼンの目標を探すのに、計画を立てて行おうとしているのがいいですね。目標を持つようにがんばりましょう。 ※このコメントは、プレゼン3回目発表前のやる気の調査結果に対するコメントです。悔いの残らないよう、最後の発表に取り組んでください。
B	プレゼンの目標を達成するための計画はありませんが、行動を起こしているのはいいですね。これからは計画を立てて行動するようにしてみよう。 ※このコメントは、プレゼン3回目発表前のやる気の調査結果に対するコメントです。悔いの残らないよう、最後の発表に取り組んでください。
C	あと少しで完璧ですね。反省できている点もよいです。プレゼンの目標達成に向けてこのままがんばりましょう。 ※このコメントは、プレゼン3回目発表前のやる気の調査結果に対するコメントです。悔いの残らないよう、最後の発表に取り組んでください。
D	プレゼンの目標－計画－行動－結果において完璧で素晴らしいです。この状態を維持できるようにしましょう。 ※このコメントは、プレゼン3回目発表前のやる気の調査結果に対するコメントです。悔いの残らないよう、最後の発表に取り組んでください。
E	プレゼンに対する目標もなく、目標を探す気持ちもあります。このままではいけませんので、気持ちをリフレッシュして目標を探すところからはじめましょう。 ※このコメントは、プレゼン3回目発表前のやる気の調査結果に対するコメントです。悔いの残らないよう、最後の発表に取り組んでください。
F	まだプレゼンに対する目標を持つことはできていませんが、計画的に目標を探そうとしているのはよいことです。がんばって目標を探しましょう。 ※このコメントは、プレゼン3回目発表前のやる気の調査結果に対するコメントです。悔いの残らないよう、最後の発表に取り組んでください。
G	プレゼンに対する目標を持っていないものの、探そうとしていることはよいことです。これからは計画的に目標を探すようにしてください。 ※このコメントは、プレゼン3回目発表前のやる気の調査結果に対するコメントです。悔いの残らないよう、最後の発表に取り組んでください。

(2) 個人指導記録（机間巡回による観察）

今回用いた個人指導記録は、教員目線での学習状況の観察内容と必要に応じた声掛け（叱咤ではなく、褒めるなどのポジティブな言葉）での対話の内容を記録したものである。観察対象となる受講者を決める基準は、出席回数が少ない・授業態度が気になる・手が止まっている・寝ているなどの状態である。

4. 「GPDS 把握シート」の出口別標準コメント

各受講者に対する指導のコメントについて、2018年度と2019年度は個別にコメントを作成していた。2020年度については、教員の負担を軽減するため、あらかじめ GPDS 把握シートの出口別に標準コメントを用意した。表5に作成した標準コメントの一部を示す。

標準コメントについては、受講者が回答した目標 (Goal)・計画 (Plan)・行動 (Do)・反省 (See) への回答をもとに作成しており、受講者自身に自分の状態を確認してもらうことにもつながると考えている。標準コメントの作成方法について、発表前調査の出口の最頻値より3つ (A,C,G) を紹介する。

まず、出口がAの場合は、目標を持っているかという質問にNoと答えているが、目標を探しているか、計画を立てているか、実行しているかという質問についてはYesと答えている。したがって、計画を立てて行動しているという部分を褒め、目標の探索を促す内容にしている。次に、出口がCの場合は、目標、計画、行動、反省の質問についてはYesと答えているが、思った通りには進んでいないと答えているため、行動や反省について褒め、このまま努力を続けるように促す内容にしている。最後に、出口がGの場合は、目標を探しているかという質問にのみYesと答えているため、目標を探していることを褒めたうえで、計画の立案を促す内容にしている。

また、どの出口の場合でも批判的な内容は抑え、褒めたり励ましたりするような内容にしておき、たとえすべての選択肢でNoと答えた受講者に対しても叱るようにはしていない。個別指導で実際に送信する内容については、機械的に自動で送信することが可能である。しかし、個人の状況に応じて内容を追加する必要があるため、自動送信のメッセージであると受講者が感じた場合は、個別指導の効果が下がってしまうことが懸念される。そこで、標準コメントもしくは標準コメントに個別で内容を追加したものについては、一定の期間を置いたのちに任意のタイミングで送信した。

5. 「GPDS 把握シート」で得られた情報とその解釈

プレゼン1～プレゼン3のそれぞれの開始前と終了後にGPDS把握シートで回答してもらい、プレゼンの取り組みに対する気持ちの自己申告結果（前後2回×プレゼン3回の計6回であるため調査1～調査6と記す）を表6のように集計した。

なお、元気づける指導のタイミングをいつにするかで、表6の使い方は変わる。今回は、プレゼン2の終了後に指導を行うことにした。このタイミングにした理由は、3回のプレゼンにおいて、プレゼン1は後期の授業開始時の勢いでなんとか乗り越え、プレゼン2もプレゼン1と同じパターン学習で乗り越えることができると考えている。しかし、プレゼン3は一番難易度が高く設定されているものであり、プレゼン2の終了後の気持ちによって不安になる受講者には、個別指導が不可欠であると考えたからである。

表6の教員の事前判断の列で示したように、調査結果を見る前は出席回数や授業態度で注目していた受講者は14、16、20、22の4人のみであったが、調査結果（平均値5以下）から受講者3、10、11、16、18、19、21、24の8人にも注目する必要があることが分かった（「注目1」）。さらに、評価値の推移（[9,9]⇒[5,5]）から受講者8にも注目する必要があると分かった（「注目2」）。しかし、その後の観察から受講者10、14、21は特に問題なしとした。結果として、受講者3、8、11、16、18、19、20、22、24の9人に、プレゼン2の終了後からプレゼン3の発表前、各受講者の授業態度に応じた元気づける声掛けを行なった。

表6 2018年度 GPDS 把握シートからの結果

受講生	プレゼン1		プレゼン2		調査4までの 平均	教員の 事前判断	調査結果 からの判断	指導の 有無	プレゼン3		参考 (最終成績)
	調査1	調査2	調査3	調査4					調査5	調査6	
	1前	1後	2前	2後					3前	3後	
1	10	10	10	10	10.0				10	10	A
2	9	9	9	8	8.8				9	9	B
3	1	8	3	3	3.8		注目1	あり	9	9	A
4	3	8	9	10	7.5				9	9	A+
5	3	5	8	9	6.3				3	8	A+
6	8	8	7	7	7.5				9	10	C
7	6	4	9	9	7.0				9	6	C
8	9	9	5	5	7.0		注目2	あり	9	5	B
9	3	6	6	6	5.3				8	8	B
10	1	6	3	6	4.0		注目1	なし	9	9	C
11	1	6	2	2	2.8		注目1	あり	2	10	B
12	9	9	5	9	8.0				5	9	A
13	8	7	9	10	8.5				9	9	C
14	欠	欠	7	4	5.5	注目		なし	3	0	C
15	10	10	10	10	10.0				10	10	C
16	10	0	3	3	4.0	注目	注目1	あり	9	9	C
17	9	9	8	10	9.0				未回答	未回答	C
18	5	1	9	5	5.0		注目1	あり	9	10	B
19	9	8	0	3	5.0		注目1	あり	9	9	B
20	10	10	8	10	9.5	注目		あり	10	9	A
21	5	1	2	8	4.0		注目1	なし	2	8	B
22	9	8	9	9	8.8	注目		あり	9	9	B
23	9	9	10	9	9.3				7	9	A
24	5	5	2	4	4.0		注目1	あり	9	9	B
25	10	10	10	10	10.0				10	10	A+
26	9	8	6	10	8.3				7	5	B
27	5	9	10	10	8.5				7	9	B
28	9	9	9	10	9.3				10	10	A
29	10	10	10	10	10.0				10	10	A

※欠は欠席した者、未回答は発表したが本調査に回答しなかった者

2020年度における指導のタイミングについては、従来行なっていたプレゼン2の終了後のタイミングでオンラインに移行することが決定したため、プレゼン3の発表前のタイミングで声掛けを行なうことに変更した。これは、表4で示したとおり授業の内容を一部変更した結果、プレゼン3の発表を15回目の授業で一斉に行なうことになり、従来のタイミングで声掛けを行なうと、発表までに1か月以上あいてしまうためである。

これは、プレゼン3を無事に終えてもらうこと（発表に使用する写真と文章の提出完了）を重視したからである。プレゼン3の開始前の気持ちによって、プレゼン3の課題提出が不安になる受講者には、個別指導が不可欠になると考えたからである。変更して行なった2020年度の集計結果を表7に示す。

表7 2020年度 声掛けタイミング変更時の結果

受講生	プレゼン1		プレゼン2		プレゼン3						参考 (最終成績)
	調査1	調査2	調査3	調査4	調査5	調査5までの平均	教員の事前判断	調査結果からの判断	指導の有無	調査6	
	1前	1後	2前	2後	3前					3後	
1	5	8	9	9	5	7.2				8	A+
2	3	5	5	9	5	5.4				10	A
3	0	3	5	8	2	3.6		注目1	あり	8	A+
4	3	9	9	9	9	7.8				9	A+
5	9	9	9	4	5	7.2				10	A
6	未	未	未	未	未	-				未	E
7	10	10	10	10	9	9.8				9	A+
8	9	9	3	9	7	7.4				9	A+
9	5	9	未	未	未	7.0	注目		なし	未	D
10	9	5	5	5	5	5.8				10	A+
11	9	9	9	9	9	9.0				9	A+
12	6	4	9	9	未	7.0			あり	未	C
13	3	8	3	8	8	6.0				9	A+
14	3	6	4	0	8	4.2	注目	注目1	あり	4	A+
15	未回答	未回答	未回答	未回答	10	10	注目		あり	9	C
16	3	9	8	5	3	5.6				6	A+
17	4	5	5	9	5	5.6				5	B
18	9	9	9	9	9	9.0				9	B
19	3	3	8	8	5	5.4				9	A+
20	9	9	9	9	9	9.0	注目			9	A+
21	9	8	9	9	9	8.8				5	A+
22	8	8	3	9	2	6.0		注目2	なし	未回答	A
23	0	0	2	9	4	3.0		注目1	なし	4	A
24	3	6	未回答	未回答	5	4.7		注目1	あり	6	C

※未は発表しなかった者、未回答は発表したが本調査に回答しなかった者

また、計6回の調査毎に標準コメントを用意しておけば、調査ごとに受講者に対して容易にコメントできる。しかし、機械的にしてしまうと受講者は慣れてしまい、コメントの重みが薄れていくと考えた。そこで、受講者にとって一番高いハードルを越えるときに声掛けを行なうことが効果的であると考え、プレゼン3の発表前のタイミングで1度だけ実施した。

表7中の教員の事前判断の列で示したように、調査結果を見る前から出席回数や授業態度で注目していた受講者は9、14、15、20の4人のみであったが、調査結果(平均値5以下)から、さらに受講者3、23、24の3人も注目する必要があることが分かった(「注目1」)。

加えて、評価値の急激な減少から受講者22にも注目する必要があると分かった(「注目

2)」。ただし、受講者9、22、23の3人はこれまでの観察から特に問題なしとした。表7中の指導の有無の列について、空欄もしくは「なし」とした受講者に対しては標準コメントをそのまま送付し、「あり」とした5人に対しては、標準コメントに補足する形で個別コメントを追記した。

調査結果より、プレゼン3の開始前の調査においては、全体的に評価値が低い結果となっていた。しかし、全員に声掛けを行なうことで、プレゼン3の発表後の調査結果の評価値は全体的に高くなっており、教員の負担が少なく、効果の高い声掛けを行なうことができた。

6. 個別指導の実践例

(1) 結果の想定例について

図3に望ましい結果の想定例を、図4に望ましくない結果の想定例をそれぞれ示す。図3で示すように、初期の段階では出口の評価値は低いが、発表を行なうごとに右肩上がりに上昇していくことが望ましいと考えている。また、図4に示すように発表を行なうごとに評価値が下降していくことは望ましくないと考えており、プレゼン2後の調査の段階で、このような結果に近い、またはこのような結果が予想される特徴を示す受講者がいた場合、個別指導を行なう必要がある。

(2) 結果の具体例

図5と図6に2018年度において実際に行なった調査結果において、右肩上がりに上昇している望ましい例と気になる例をそれぞれ示す。

2018年度に受講した29人のうち、プレゼン2【後】までの教員の事前判断やGPDS把握シートの調査結果に基づき、指導が必要だと判断して個別指導を受講者9人に行なった。指導後に行なった調査結果では、9人のうち7人は指導後の評価値が上がっており、そのうちの3人を例として図5に示す。また、残りの2人は指導後の評価値は同じ値であり、評価値が下がった受講者はいなかった。

また、図6に気になる結果の一例を示す。これは、プレゼン1【前】に行なった調査結果

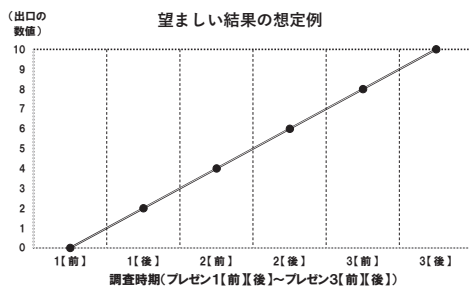


図3 望ましい結果の想定例

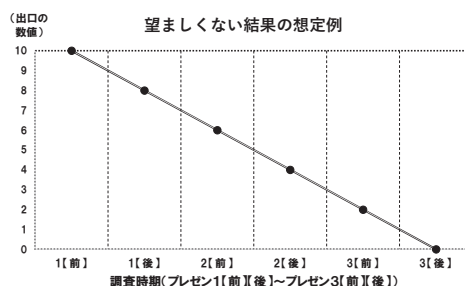


図4 望ましくない結果の想定例

より、プレゼン3【後】に行なった調査結果の評価値が下がってしまっているケース（29人中5人）、個別指導をせずに評価値が下がってしまったケース（3人中2人）が好ましくない結果であると考えている。

しかし、本個別指導による本来の目的は、GPDS 把握シートによる評価値を上げることでなく、一番ハードルの高い最後の発表から離脱させないことである。この点については後述するとおり、多くの受講者が発表を行なっていることから、適切な指導を行なうことができたと考えている。

図7と図8に2020年度において実際に行なった調査結果において、右肩上がりに上昇している望ましい例と気になる例をそれぞれ示す。

2020年度についてはプレゼン3（前）の調査後に全員に対して標準コメントを用いて個別指導を行ない、一部の気になる受講者に対しては、標準コメントに加えて個別にコメントを追加した。図7で一例を示すように指導後に評価値が上がったのは受講者24人のうち10人で、図8で一例を示すように評価値が下がったのは3人であり、残りの11人については変化なし（未回答1人含む）である。このことから、2020年度については標準コメントを利用することにより、教員の負担を軽減することができ、結果も良好であった。

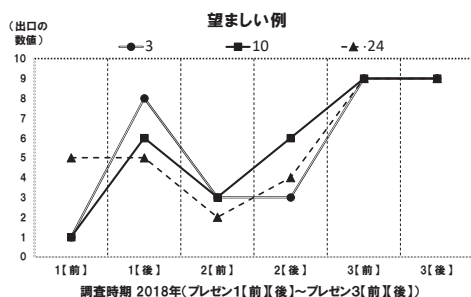


図5 2018年度 望ましい結果の例

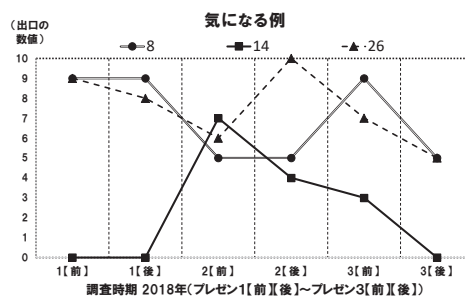


図6 2018年度 気になる結果の例

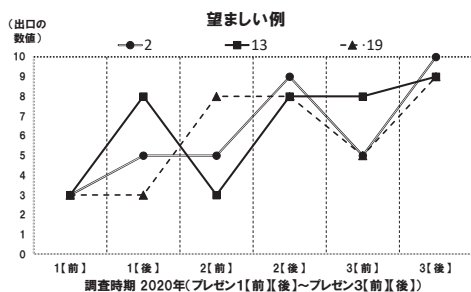


図7 2020年度 望ましい結果の例

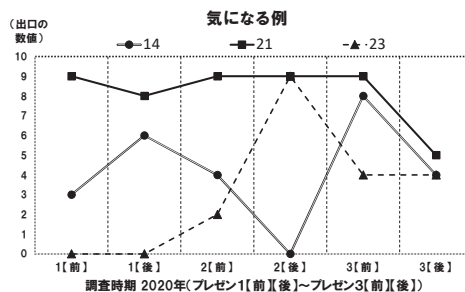


図8 2020年度 気になる結果の例

(3) 2018年度における、特に気になった受講者と個別指導

図9に2018年度に注目すべきと判断した者のうち、プレゼン2【後】までの結果について判断した結果、評価値の推移が気になった受講者3、8、11の評価値の変化の様子と個別指導の記録の一部を示す。

①受講者3の場合

プレゼン2の発表時、複数の商品を紹介するとともに値段も記述していたため、分かりやすくできていると褒めた上で、目標をしっかりと持てばうまく説明できる能力はある旨の声掛けをした。

②受講者8の場合

プレゼン2の発表時、スライドのできも良く、文字の大きさも適切であったことを褒め、自信を持てば大丈夫と声掛けをして、さらに、発表に不安がないかを尋ねた。その後、まじめに取り組んでいたため様子を見守った。

③受講者11の場合

調査結果は芳しくなかったものの、スライドの内容は1位、2位を争うほど良くできており、なんら問題ないように見受けられた。しかし、自分自身の発表に対して肯定的に感じていないと思えたため、内容は良くできている旨の声掛けをした。さらに、不安に思っていることがないかを尋ね、十分できていたため肯定的に捉えるように勇気づけた。

(4) 2020年度における特に気になった受講者と個別指導

図10に、2020年度に注目すべきと判断した者のうち、評価値の推移が気になった受講者の評価値の変化の様子と彼らに行なった個別指導の記録の一部を示す。

2020年度については、表7で示す通り、プレゼン3前までの結果で判断をしている。特に、出口の評価値が2以下の場合、目標を持っていないことに加え、探してもいない状態であるため、たとえ平均値が高くとも注意しなければならないと考えている。

①受講生3の場合

これまでの発表の内容はとてもよくできていたため、教員の事前判断では注目していなかった。しかし調査結果は芳しいものではなかったため、過去の発表について褒め、自信を持って取り組んでもらえるように配慮し、「写真が多く使われており、字も大きくてポイン

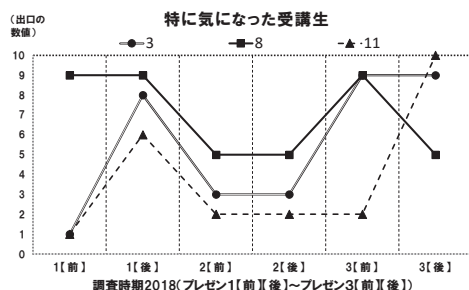


図9 評価値の推移が気になった受講者（3,8,11）

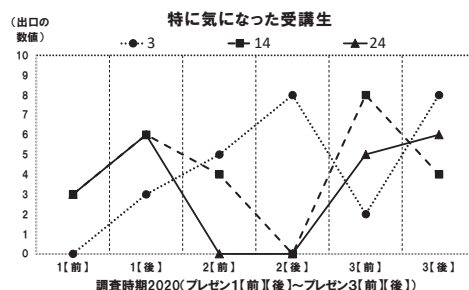


図10 評価値の推移が気になった受講生（3,14,24）

トが絞られており、とても分かりやすいスライドだったと思います。この調子で、最後の発表も頑張ってください」というコメントを追加した。

②受講生14の場合

発表の内容も問題なく、まじめに取り組んでいるように見えていたが、期限内に課題を提出しないなどの気になる兆候があり、プレゼン3に使用する写真が重複して提出されていた。したがって、提出に関しての配慮として、「提出していただいた写真の1枚目と2枚目が同じになっていますが、このままでよろしいでしょうか。意図的に同じ写真を使用しているのであれば、提出は不要です」というコメントを追加した。しかし、このコメントに対しては既読が付いていない。

③受講生24の場合

授業の開始直後は数回来ていたが、1回目の発表を終えることなく出席しなくなっており、オンライン移行後、心の病で通院中との連絡があった。1回目と2回目の発表に代わる課題も課す必要があったため、課題の提出期限について猶予を設けたり、既定の文字数にこだわらなくてもよい旨を伝えたりするなど、課題の提出が負担にならないように「希望があれば延長します。文字数制限はあくまで目安ですので、気軽に取り組んでください」というコメントを追加した。

7. 指導結果の考察

この授業実践は2018年より継続的に行っており、本報告では2018年から2020年の実践についてまとめた。各年度において、2回目の発表まで終えることができた受講者は、2018年度は29人、2019年度は39人、2020年度は20人の計88人であり、その中で3回目の発表を行わなかった受講者は2020年度の1人のみであり、当初の目的であった最後の発表から離脱する受講者をなくすという点について、十分な成果が得られたと考えている。

今回用いたGPDS把握シートの利点は、目標 (Goal)・計画 (Plan)・行動 (Do)・反省 (See) に対する4段階の質問と17種類の出口から受講者の気持ちを把握することで、教員の経験則だけでは見えない要注意者の発見につながる点と要注意者とする裏付けるデータを得ることができる点である。

特に、この方法はYes/Noの2択の質問に答えるだけで結果が得られるため、受講者の負担も少なく時間も要さない。加えてmanabaを利用して運用を行なうことで結果を瞬時に把握することができる。したがって、受講者の状態を簡易に判別し、目標を見失っているなど注意すべき受講者の把握ができ、瞬時にサポートすることが可能になる利点は大きい。また、結果の集計も容易であり、標準コメントの利用など教員の負担も少ない。

今後は、発表後に行なった個別コメントを、発表前と発表後の変化を考慮して、標準コメントに進化させたいと考えている。そのような修正を加え、教員の負担をさらに軽減しながら、効果的な指導ができるようにしたいと考えている。また、各出口に至った経緯や理由についての調査を行ない、得られた結果を分析することにより、さらに質の高い個別指導ができるように改善していきたいと考えている。

8. おわりに

本稿では、プレゼンの一斉授業（講義：企画、演習：資料作成・発表）において、難易度を段階的に工夫した3回の発表の前後での受講者の気持ちを的確に把握し、彼らの思いに寄り添った個別指導の導入を行なった。ここで実現を目指した指導方法の考え方は、①個々の学習状態や心理状態を把握した情報をもとに個別指導を行ない、②観察を通じた声掛けや励ましによって学習指針を与え、③成果よりも努力を評価することであった。

具体的には、プレゼン授業において、発表への不安で授業を離脱することがないように、授業15回中で難易度が段階的に上がる3回の発表の指導方法を工夫し、発表の体験的学習が可能な授業とした。さらに、教員の指導記録とGPDS把握シートの結果の2つの情報を照らし合わせることで、指導すべき受講者を漏らさずに把握し、標準コメントをベースとした個別コメントを与えた。これにより、対話に重きを置いた個別指導において、教員の負担を軽減したうえでの丁寧な指導を可能にしたと考えている。このことは、絶えず受講者に寄り添いながら、一斉指導の中で対話に重きを置いた個別指導を可能にしたと考えられる。

なお、本指導方法は経験を重視し、発表の機会を増やしており、より鮮やかな図表の作成方法やアニメーションの利用などの技術面に関する授業時間を割愛しているため、プレゼンソフトを利用するテクニックについては基本の部分しか教えていない。また、発表の内容に関して厳しい指導はしていないため、成長は緩やかであり、指摘に対する打たれ強さはあまり鍛えられていないという面はあると感じている。

今回使用したGPDS把握シートは、質問の文言を変えるだけで、プレゼン教育に限らず異なる授業場面でも容易に導入が可能である。しかしながら、回答が容易である反面、各出口に至った経緯が不明であるという点などは今後も引き続き調査を行い、今後の課題としたい。

参考文献

- 正木幸子、横山 宏、佐藤敦子、中谷陽仁「大学におけるプレゼンテーション教育手法の総合的検討」『大阪商業大学論集』第191・192号合併号、2019年
- 横山 宏、後藤由美、富島磨由美、増尾美恵子、ワークショップ「生徒・学生に秘められた『イベントのやる気度調査』」『情報コミュニケーション学会第12回情報教育合同研究会、研究報告』Vol.13、2016年、p.18-19
- 中谷陽仁、佐藤敦子、正木幸子、横山 宏、「大学のプレゼン教育における個別指導法の組み込みの研究（1）—GPDS把握シートを用いて—」『情報コミュニケーション学会第17回全国大会論文集』、2020年、p.64-67
- 中谷陽仁、佐藤敦子、正木幸子、横山 宏、「大学のプレゼン教育における個別指導法の組み込みの研究（2）—GPDS把握シートを用いたオンライン授業での取り組み—」『情報コミュニケーション学会第18回全国大会論文集』、2021年、p.36-39
- 大阪商業大学、「manaba ログイン」、<https://daishodai.manaba.jp/>（2020年1月28日アクセス）。朝日ネット、「manaba とは」、<https://manaba.jp/>（2020年1月28日アクセス）。